

東京都オープンデータ・ラウンドテーブル

議事録

令和3年2月16日（火）

第一本庁舎7階 中会議室

オンライン併用

事務局：

ただいまより、東京都オープンデータ・ラウンドテーブルを開催いたします。議事に入ります前に、本日の進め方についてご説明いたします。本日の会議はオンラインでの会議を併用し開催させていただいております。原則、事務局側で画面操作を行いますので、発表者の方の発言の際に事務局からご案内いたしたいと思っております。オブザーバーの皆様におかれましては、画面操作を行わないようお願い申し上げます。

まず、会の開催にあたりまして、戦略政策情報推進本部樋口 ICT 推進部長よりご挨拶と本日の趣旨についてご説明申し上げます。

樋口部長：

本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。会議の冒頭に当たりまして、この東京都オープンデータ・ラウンドテーブルを開催した経緯と、本日の趣旨についての説明をします。

これまで東京都は、平成29年度から今年度までの4ヶ年計画で、少子高齢化、まちづくりなど13の重点分野を中心にオープンデータを推進してまいりました。そのデータを、「東京都オープンデータカタログサイト」というWebサイトにおきまして、4万件のデータ2,000件超のデータセットを整備してまいりました。また、そのほぼ全てをCSV形式なども互換性のあるファイルでアップロードしております。しかし、一方、このカタログサイトへのアクセス数は1日あたり約200PVとなっており、多くの方にご利用いただけていない状況になっております。都としては、オープンデータとして公開するという段階から、オープンデータをいかに利活用していくかという段階に、何としてでも入ってまいりたいと考えております。

また、東京都は行政のデジタル化の遅れなど、コロナ禍で明らかとなった構造的な課題に対して、DXをテコとして、制度や仕組みの根本まで遡った構造改

革を昨年8月より実施しております。都政のクオリティ・オブ・サービス(QOS)を向上させることで都民のクオリティ・オブ・ライフQOLを高めていくこととしております。今申し上げました都政の構造改革を進めるために、先週末になりますが、2020年から2022年度に短期集中で取り組むプロジェクトの具体策を示した「シン・トセイ 都政の構造改革 QOS アップグレード戦略(案)」を公表し、現在、都民の皆様から広くご意見を募集しており、今年度中に都の戦略を取りまとめる予定です。本日ご参加いただきました皆様には、後ほどこちらのURLを送付させていただきます。この構造改革の突破口として、特に最優先で進める7つの事業をコアプロジェクトとして定めまして、その内の一つに「オープンデータ徹底活用」が位置づけられているというところでございます。

このオープンデータ徹底活用プロジェクトでは、データは地域課題の解決や新たなサービスや産業の創出に繋がる社会的資源であり、シビックテックや企業等がこのオープンデータを活用して新たなサービスを創出していく、官民協働スタイルの構築を目指しております。

このプロジェクトの一環として、本日、東京都オープンデータ・ラウンドテーブルを開催いたします。データの活用を希望する皆様からのニーズを直接お聞きすることで、行政のオープンデータ化の取組を推進していくとともに、行政のデータと民間のデータの組み合わせにより民間サービスの創出、進化に繋げていければというふうに考えてございます。

本日お話しいただくご提案について、難しいものもあろうかと思いますが、まずは皆様のニーズを直接伺うことで、我々都庁側のデータに対する意識改革や気づきの場としてさせていただきたい考えでございます。そのため、各局のオープンデータや構造改革担当がオンラインで参加させていただいております。また、区市町村の職員の方々や、あるいは内閣官房の方もオブザーバーとして傍聴いただいております。もちろん、本日全ての結果が出るとは思っていません。本日をきっかけに、オープンデータの意識等を都庁内に周知し、来年度以降、このラウンドテーブルが徐々に、かつ、確実に持続していくよう、継続的な取組に繋げていきたいと考えております。どうぞ皆様の忌憚のない前向きなご議論をお願い申し上げます。よろしく願いいたします。

事務局：

それでは、提案者の方々のプレゼンに入りたいと思います。プレゼンの流れといたしましては、今回は3名の方から連続してプレゼンテーションを行っていただきまして、その後、プレゼンいただいた3名の方と都庁各局との意見交換と考えております。それではまず、市民開発者としてご活躍されております奈良様よりプレゼンテーションをよろしく願いいたします。

奈良様：

よろしく願いいたします。

都市データ研究者と書いておりますが、市民の立場で様々なアプリケーションを開発しております奈良和紘と申します。本日はオープンデータで誰でもシームレスに移動できる都市東京へということで、主に人の移動ですとか、まちづくりといった観点から、オープンデータに関してご提案させていただきたいと思っております。

自己紹介になりますが、私は、民間企業でIT技術者としてデジタル化の仕事をしております。一方で、土日祝日には市民開発者として、オープンデータを活用した地図であるとか、Webアプリケーションというのを作成開発しております。

本日は、3部構成としております。まず社会に広がるオープンデータということで、特に人の移動等にフォーカスしまして、オープンデータの活用の先進的な事例を紹介させていただきます。

その上で、データ公開に関する要望ということで、一開発者あるいは一都民という目線で、より具体的なデータ公開のご要望の方を出したいと思っております。

最後に特定のデータを問わず、もっと使いたくなる、活用したくなるようなオープンデータのさらなる普及という観点で、いくつか発言の方を差し上げたいと思っております。

まず、ご参加いただいている皆様であればご存知かもしれませんが、2月1日からGoogleマップが首都圏の列車のリアルタイムな位置情報の配信を始めています。

左側の画面をご覧になってわかるように、地図の上にリアルタイムに列車がどこを走っているのかが分かるようになっております。実はこちらは、Googleさんが独自にデータを収集しているものではなくて、オープンデータが使われております。東京都交通局様をはじめ、JR東日本さん、東京メトロさんの発信されておりますデータを使って、リアルタイムな鉄道の走行位置を表示しています。もともとは、「東京都公共交通オープンデータチャレンジ」という、開発者向けの開発コンテスト向けに各組織が提供されているデータとなるのですが、いわゆるガリバーIT企業であるGoogleさんが採用したということがエポックメイキングな出来事と考えております。当然ながら、列車の位置情報に関するデータ等はそれ自体がオープンデータとして非常に公益の高いもので、非常に価値が大きいものですが、さらにそのデータが利用者の多い地図アプリで活用されることにより、相乗効果を発揮しているという非常に好事例であるというふうに考えております。同じく、こちらのデータを使って他の国内の事業者さんも、乗換案内サービスで、例えば電車の遅れを加味したリアルタイムな経路検索等、そういった機能も順次追加しております。まさに交通局さん含め各組織のオープンデータが活用され始めているという状況でございます。

列車位置情報なぜ広く普及し始めたのかという理由ですが、機械判読性が高いということに尽きると思っております。機械判読性については後ほどご説明いたしますが、人が目で見てわかりやすいデータというよりは、プログラムが読み込んでいろんな形に処理をしやすい形で、かつリアルタイムに提供されております。一昔前では、列車の位置情報といえば駅の電光掲示板等に表示されるぐらいだったと思うのですが、そういったその最終成果物と比べると、よくオープンデータの世界っていうのは、データは食材で最終成果物は料理であるというような言い方をされております。まさにこの料理の代わりに食材や、あるいはその使い方であるところのレシピを公開することで、データの発信者が意図しないような様々な利用シーンが広がってくるところがオープンデータの価値の一つではないかなと考えております。

一つ例えますと、先ほどのGoogleの例では人気のアプリがオープンデータを取り込むことで、ユーザーに新しい価値を提供しておりますし、当然オープンなデータですので、Google等のIT企業のみならず、いわゆる趣味でプログ

ラミングなさっている方も自分なりのレシピを投稿すると、自分なりのプログラムを作って、発信することも可能となっております。こういった形でシェアナンバーワンの地図アプリを通じて、数百万人を超える人々にリーチしているというところではあります。

機械判読性について少し補足させていただきますと、従来は鉄道会社さん各社がアプリや、ホームページ等で列車の遅延を発信されておりますが、人は読み易いのですが、プログラムは読めません。また、アプリにアクセスした人以外には全く伝わらないという形で、制約があったと思っておりますが、昨今はスライドでも提示しておりますが、こちらの形式になりますと人は読みにくいですが、これを読み解くと、ある番号の列車がどこどこの駅の間を走っていますよということが、プログラムに容易に読み解けるようにしております。従いまして、外部のサイトやアプリに組み込んで、いかようにでも調理ができるところが機械判読性を持ったデータの特徴でございます。総務省も、オープンデータの定義の中で、機械判読にしたものというところは不可欠な条件として提示されています。

少し目線を変えまして、東京都で公開されているデータを踏まえ、市民開発者、あるいは、私は3歳の子供がいる子育て世代ですが、そういった目線でいくつかご提案をさせていただきます。

オープンデータだけでシームレスに移動できるかと書いております。意外にお出かけする際に、ベビーカーを押しているような方や車椅子の方等は、気にしないといけない所がたくさんあります。駅で乗車・降車する際は、当然バリアフリー情報必要になりますし、電車の移動中には運賃とか列車の時刻表の情報が必要となります。オムツ替えをしてバスで移動して目的地もバリアフリーに対応しているかと、色々なことを気にしながら、一つ一つの段差を乗り越えてベビーカーを押している、そういった毎日です。

翻って東京都様のオープンデータ整備状況を見ますと、かなり網羅的に必要な情報が公開されていると言えらると思っております。私自身こちらのデータを改めて整理してしまして、もうほぼ申し上げることないのではないかなと思って生活しておりました。

ところが、ちょっと落とし穴がありまして、ある日都営地下鉄さんご利用させていただいたときに、駅のエレベーター一点検中でした。駅にエレベーターがあるということを事前にアプリ等を調べて移動したのですが、利用できなく、階段をベビーカー抱えて階段を上った経験がありました。帰宅後にエレベーターのデータ整備状況の確認したのですが、既存のオープンデータには、どの駅にエレベーターがあるか、どこの出口にエレベーターがあるかということは網羅されておりました。しかし、点検工事日程はオープンデータになっていませんでした。また交通局さんのサイトを改めて確認したのですが、各駅のエレベーター一点検工事日程は記載されているものも、実は PDF 形式になっておりました。なかなかそのお出かけ前に PDF を見るかということ、ちょっと都民の目線から言うとなかなかハードルが高いのかなという印象でございます。

それも踏まえまして、今回のご要望としましては、毎月 PDF で公開されているエレベーターの点検工事日程を、機械判読可能なデータでオープンデータ化していただけないかということになります。利用シーンとしては、先ほどご紹介したような地図アプリ等に組み込む他に、例えば発信されてくるリアルタイムな情報を拾って、SNS で自動的に注意喚起するような仕組みも作れるのかなと個人的には考えております。また、より使い易さという観点で申し上げますと、CSV よりも機械判読しやすいデータ形式というものがございます。JSON 等の形式なのですが、そういったものもご検討いただきたいです。また、駅番号等を既存の東京公共交通オープンデータと同じようなコード体系を採用していただけると、他のデータと組み合わせ易くなるため、こちらのデータが更に価値を発揮してくると考えております。

一つ優良事例ということでご紹介します。ニューヨーク州都市交通局 MTA です。こちらは、公式サイトでエレベーターの点検故障状況をリアルタイムに公開されています。点検中の代替手段も掲載されているだけでなく、Google マップにも情報提供されており、こちらのデータを参照できるようになっています。また、交通局独自のルート検索サイトとしまして、バリアフリー対応ルートを検索する機能が用意されているのですが、そちらにもエレベーターの点検

情報が反映されるようになっていきます。ある日時を指定して検索したときに、このバリアフリールートは途中のエレベーターが止まっている、あるいは止まる予定がある場合は、代替ルートも含めて提案をしてくるような仕組みになっております。

なぜこれができるのかという理由は、まさにこの MTA さんが保有されているいろんな情報、工事を含めたいろんな情報が、オープンデータ化されているということに尽きます。また、地下鉄とかバスとか組織が別で、その中でも設備系、運行系、例えば落し物を管理する部門とかにが分かれています。共通的なデータ規格を採用しているため、こういった便利サイトが作りやすくなっています。また、ニューヨーク州がオープンデータの開発者を束ねたコミュニティを組成されておりまして、ハッカソン等も、いわゆる開発者イベントやコンテストについても頻繁に開催されています。

この様なニューヨーク州の事例を加味しますと、こちら記載しておりますようにまさにこのエレベーターの工事情報、こちら側と最後のピースが揃うと思います。また、複数局にまたがっているデータ、例えばバリアフリー情報等をそれぞれ管理公開されておりますが、例えばそれらのデータも項目や ID 体系等が揃ってくると、より使い易い価値のあるデータになると考えております。

最後にですが、オープンデータのさらなる普及に向けて提言させていただきます。キーワードとしては、「統一性」「鮮度」「継続性」の三つがあると思っております。統一性の観点ではですね、繰り返し申し上げているようにデータによってフォーマットがまだまだ統一されていない部分がございますので、現状では開発者の方がデータの加工や整形のコストを負担することになってしまひまして、魅力的なアプリの公開に向けた足枷になると懸念されております。例えば埼玉県は、県内共通データフォーマットを作成されています。そういった取組が、東京都の中でも広がってくると良いのかなと思っております。複数局から類似のデータを公表しているというのは先ほど申し上げたバリアフリーデータに限らず、他にもあるかもしれませんので、是非この機会にご確認いただければと思います。また、これオープンデータあるあるかもしれませんが、

公開を前提としていないデータを後から公開すると決めると、その公開前後でデータの掲載基準が異なってしまう問題が生じているケースも散見されます。

最後2つが、鮮度と継続性というところですが、やはりリアルタイムの情報というところが、今後より一層のスマートフォンの普及等により求められてくることと思います。レンタサイクル一つとっても、設置場所と電話番号だけが載っているのと、空き状況もリアルタイムに分かるのでは使い勝手が変わってくると思います。

また、継続的なデータ更新も、ぜひ切にお願いしたいところでして、途中で更新が止まってしまっていたり、あるいはリンク切れになっていたというデータがあると、オープンデータがあったからこそ作ったサービスですが遺産になってしまいます。ぜひ継続性という観点も考えていただければと思っております。

最後になりますが、1人の都民、あるいは1人の開発者として、東京がオープンデータ先進都市としてさらに飛躍をされ、もっともっと料理したくなるようなデータが増えてくることを楽しみにしております。本日は貴重な機会ありがとうございました。

事務局：

奈良様ありがとうございました。続きまして、データを活用したサービス提供者の視点からのお話をお伺いできればと思います。株式会社ベスプラ代表取締役遠山様よりプレゼンテーションをお願いいたします。

遠山様：

株式会社ベスプラの遠山と申します。新たなサービス開発に向けたオープンデータ活用としてお話させていただきたいと思います。今日は我々の会社の紹介と、健康サービスの課題および解決策、フードロス削減の課題および解決策、最後にオープンデータへのお願いの四つを話させていただきたいと思っております。

まず一つ目、株式会社ベスプラの紹介ですが、東京都の渋谷区で2012年に設立しました。ビジョンはICTで社会課題を解決するということを一生涯懸命頑張っています。全員ヘルスケアのエンジニアで6人のエンジニアで構成されている企業です。

我々の強みとしては、大手生命保険会社様、銀行様にも認められている高い技術力だと思っています。我々がやっている事業は大きく三つありまして、健康の事業、消費の事業、雇用の事業、この三つでございます。

健康の事業は高齢化を背景に、認知症や生活習慣病を予防しましょうということで、「脳にいいアプリ」というスマートフォンアプリを展開させていただいています。認知症予防のサービスとしてはシェア1位を取っています。次に消費のサービスですが、これは食品ロスを減らしたいということで、時限的価値のマッチングですね。よくスーパーであるタイムサービスのようなものも地域の飲食店でできるような「The TIME SALE」という、フードロスを避けながら地域の消費を活性化するサービスを展開しています。最後に雇用のサービスですが、「The TIME WORK」というサービスで、人材不足の課題について、高齢者、介護士などの時間的な制約がある方の雇用マッチングにより地域の雇用を活性化したいということで、地域活性化させたエコシステムというものを目指して開発をしています。

健康サービスの課題および解決策、我々が健康サービスとして意識しているのは、やはり認知症がない世の中を作りたいということが主です。1,364万人の軽度認知障害(MCI)を含む認知症患者が予想されており、医療費もとんでもないことになっており、世界的にも同じことが起こっています。元々このサービスは、私の家族が認知症になってしまったことがきっかけで、何とかしたいと思いサービス開発をしています。我々のサービスは、まず検査をして状況を把握しましょう。その後、その人に適した予防をしっかりと、アプリで実施しましょう。最後に家族のケも含むのですが、検査の情報を家族と共有する家族サイトを含めた総合サービスを展開しています。このアプリですが、いろんなところからご評価いただいております。ありがたいことに、科学的に認知症の有効性についてもエビデンスが取れてきており、第一生命さんや、三菱UF

さんのヘルスケアのアプリにも、弊社の技術を提供させていただいております。

ただ、「人は必ず飽きる」という課題があります。解決策として、様々なイベントなどの情報で、気持ちを動かすことで解決できないか思っています。我々は自治体様に、このアプリを展開する仕組みを持っています。例えば、渋谷区のユーザーサマリー情報を渋谷区へ提供することで、何か健康的な政策を立案される際の参考情報にさせていただいたり、ケアマネさんとつないで一人一人の健康状態を把握していただいたりしています。重要なのはインセンティブとなるポイントで、イベントに行ったり、何かに参加するとポイントがもらえ、何かにポイントで利用できる仕組みを、自治体さんに展開させていただいています。スライド④と⑤の部分ですね、市のイベントに行くと QR コード読み込むとポイントがもらえます。実際に、⑤のところでは貯めたポイントを市の保養所であったり、飲食店さん等でも QR コードクーポンを読み取るとポイント使える仕組みを無償で提供させていただいています。

ここで大切なのは、やはりオープンデータと思っています。というのもやっぱり健康が大事な要素、外に出て体動かすというのは、きっかけであったり気づきというのが大事です。

「だれでも東京」というサイトの公園、飲食店など多種多様な情報が機械的に読み込めるデータでオープンデータ化されています。このデータを読み取って、アプリに組み込み、今日この公園で脳トレするとポイントもらえるよとか、そういったところを日替わり、週替わりでデータの分だけイベントを実施することもできます。

この様なデータを一企業で収集するのは少々難しいため、やはりオープンデータがあると、自治体さんにも色々提案できますし、我々のようなサービス事業者も活用できるため、広げて欲しいと思っています。

続いて、フードロス課題の解決策です。世界的に見ても日本はフードロスがかなり多い国で、経済損失、ゴミの処理費も 2 兆円と大きいです。これ何とかしたいと考え、「The TIME SALE」というサービスを提供しています。例えば飲食店の方が、今日は魚が余りそうだから、魚の料理をちょっと安くしますと

登録すると、その周辺のユーザーさんにタイムセールが通知され、それを見た方が来店するというシンプルなサービスです。飲食店さんは、ログインすると自分の周りにどんな人が何人いるかが分かります。具体的にタイムセールを作成するには、何時から何時まで、この商品をいくらで、商品の写真を添えて登録するだけです。ユーザーはここに行くを押すと商品が取置され、飲食店に行った際に画面を見せてその商品を受け取るという仕組みになっています。

AIによる製造・販売の提案というのを開発中です。やはり安く売るだけではなく、飲食店さんに製造や販売を計画的にやっていただいていたかたには、フードロスが全体的に減っていかないと思っています。在庫のデータを入れていただいて、売り上げはPOSから集め、気温が上がりそうといった情報を分析し、何をいつ、どのぐらい作るかとかそういったことを提案します。これは技術的な問題ですが、やはり販売の計画を立てても需要予測というのが難しいと思っており、データ情報を見て、仕入れや販売を工夫する、できることをしっかりやっていくことが必要と思っています。我々も今回知ったのですが、中央卸売市場のサイトに卸売予定数量と販売結果のオープンデータがあるのですが、これを分析していくと、何がいつどのぐらい、いくらで販売されたか、ロスの量がどのぐらい分かるため、その情報を飲食店や卸の方に提供できれば、仕入れの計画や、在庫のロス削減に役立てていただけたらと思っています。実際、やっぱりオープンデータは重要で、外食産業の方へヒアリングしたところ、今まで99%以上仕入れや在庫管理は人の感覚で対応されています。今はAIが発達してきているため、予想と実績のデータを集積すると、需要とかロスの予想が可能になっています。この予測データを配信することで、仕入れや在庫管理の判断に生かすことができるため、すごく大切な情報源だと感じています。ただですね、需要構造というのはすごく複雑で大変なので、データを継続して分析していく必要があります。実際にサービスを提供した先に、どんな世界が実現できるかということ、市場分析データを店舗へ展開し、その店舗さんから一般ユーザーに繋がれば良いと思っています。例えば、市場のデータを分析して、鯖が余っているため安くなりそうなことが分かった場合、鯖が必要な飲食店にその情報を展できますし、飲食店さんが鯖のメニューを登録していただければ、その店舗の鯖のメニューをユーザーへ配信することができます。

我々の健康アプリでは、食事の管理もして、野菜や魚などを食べたかどうかまで把握することができます。魚が必要な方に今近くの飲食店で魚が食べられるとか、スーパーで今ちょっと安くて買えますよといった情報を提供することでできます。需要を高めるといった健康維持とフードロスを繋げて削減できるような未来っていうところが、データを使うと実現できるようになってきています。

最後にオープンデータへのお願いがあります。

1つ目は周知のお願いです。サービス事業者にとってオープンデータの重要性は高まっていると思っています。AI技術も発達し、かなりいろんなデータがいろんなことに使えるのですが、存在に気付かない事業者もいます。私もつい最近まで知りませんでした。色々な方に向けてデータの存在を広く周知した方がいいと思います。

2つ目は継続のお願いです。先ほど奈良様も仰ってましたが、データの質っていうところも若干ありますけれども、市場のデータはCSVで取得できるのですが、機械的に読み取れる状態ではないため、機械的に読み取れる形式で提供していただければ利用する方も増えると思いますし、我々としても大変ありがたいと思っています。あと、「だれでも東京」のデータをさらに拡大して継続していただきたい。特に飲食店の情報は非常にお願いしたいと思います。

最後に、やはり続けていただくっていうところが、重要と思っています。我々がオープンデータを利用してサービスや仕組みを構築しても、そのデータが提供されなくなってしまうとサービス自体が消滅してしまうため、そこはぜひお願いしたいです。私からは以上となります。ご清聴ありがとうございました。

事務局：

続きまして、研究者の視点からお話をお伺いできればと思います。東京都立大学都市環境学部清水教授よりご説明をお願い申し上げます。

清水教授：

東京都立大学の清水でございます。よろしくお願いたします。それでは提出した資料に基づきまして説明をさせていただきたいと思ひます。

まず、自己紹介ですが、東京都立大学観光科学科に在籍をして研究教育をしております。数年前に、ある受験サイトで観光学というキーワードで検索したところ、学科レベルで200以上もありました。その中で、我々の学科がどのような特徴かを一言だけ申し上げると、おそらく理系に属している日本で唯一の学科であると思ひています。観光は、ずっと経験と勘に基づいてきた産業と言われていりる中で、そこに定量的なものをうまく組み合わせて、良い観光を実現していくことが今求められているのだが、研究教育の現場はなかなかそういう体制になっていない中で、我々は唯一理系の観光系学科として、こういう分野に関心を持ってやっているところであります。

最初に結論といひますか、私の考えを具体的に述べることになるのですが、今回こういった機会を頂戴して、オープンデータを私自身も正確に理解してないところはあるし、私が思っているよりもっと広範な公開データのことを総称して多分オープンデータだと思ひているのです。私の理解する範囲と私が関わっている範囲で、特に観光分野に特化して、東京都、加えて国に要望したいことを、整理をさせていただいています。

実は東京都さんも含め、多くの自治体の統計情報は、相変わらずPDF形式なんです。何か分析をしようと思つと、PDFをダウンロードしてデータを打ち込む必要があります。そういったデータはやはり最低限CSVファイル等で公開することを願ひしたいと思ひます。あと公表されているのはいわゆる元のアンケートベースの調査を集計した1次集計データであると理解していますが、もう少しプライバシーが損なわれない程度に、条件付きで集計前のデータを提供いただければ、もっと深い分析ができると思ひています。

東京の観光サイト「GO TOKYO」がありますが、そのアクセスログデータとか、それから例えば民間がとっているGPSベースのデータとか、それから携帯電話ベースの位置情報ビッグデータですね、こういったものを行政の方で購入してストックしていただき、研究機関などに積極的に提供していただければ、いろんな研究者が参入して分析しますので、それらの結果を積極的に回収して

公開するような仕組みがあれば面白いと思います。観光の世界にももっとデータに基づいて云々というふうによく言われるのですが、まず中小の企業や小規模な観光協会とか、観光地域づくり法人（DMO）ではそういうことできる力がありません。

そういった中小企業等に、観光ビジネスをやっていただくのにその応援できるようなデータを、うまく研究者等の力を借りて公開していくことをやったらどうかと思っています。

私自身は観光のデータを使った政策評価の研究をよく持ちかけられますし、そういうことに興味を持ってやろうとするのですが、アウトプットとしてのデータはたくさんあるのですが、評価対象となるインプットデータの情報がほとんどありません。ホームページ見てもほとんど書いてないということもありますし、それは国や東京都だけではなくて、観光協会などもおしなべて同じような状況です。結果の要因を因果推計するような取組内容のデータベースもオープンデータ化できないかと思っています。

東京は日本のインバウンド観光市場の中心的な目的地ですが、やはり東京のイメージが日本観光全体のイメージに繋がっていくんですね。特に、最後の方にお話をするのですが、観光の世界でもSDGsの考え方が今すごくもてはやされ始めています。そういった中で、SDGs指標の中で環境関連データが、東京だけではなく、日本全体だけでなく、世界的にも公表が遅れています。観光による環境影響をモニタリングする体制を作って、積極的に公開をしていくと、東京都も一目置かれると思います。

それから昨今の感染症の状況や対策の情報とか、それからアクセシブルツーリズム、体の不自由な方とか、高齢者の方とかなかなか通常の観光ができないような方々にも機会を提供することが求められていますし、それから密を回避するという意味での混雑情報ですね。これらの観光に役立つような情報を、例えば「GO TOKYO」などに持続性可能性ダッシュボードみたいな形でいろんな指標を見られるようにしておくといいですね。定期的に更新し、きちんと改善していることを赤裸々に見せていくということが、今後は世界から信頼され、観光客がやってくる観光地には必須のことになるので、是非やっていってはいかがでしょうか。

それから、先ほどもお話があったのですが、データの存在がわからないとか、データの存在はわかっても扱い方がわからないということがやはり結構多いです。いわゆるデータの活用講座みたいなものを要請に基づいて開催することが多いのですが、思ったよりも受講者のデータの理解度が低くて困っています。

観光系の学科にデータサイエンティスト寄付講座みたいなものを、意欲的に国や都や民間企業の方で設置していただけるようになると、観光の世界でデータが定着してくると思っていますし、そういったことに関心を示す、特に若手の研究者が入ってくると思います。

残り時間で、この先のスライドを簡単に説明させていただきます。
私は、いろいろな観光地から観光の地域経済効果を知りたいという相談を受けます。国、東京都もそうですし、ほとんどの自治体や観光協会が一番気にしているのは、入場者数や来訪者数もさることながら、観光消費額です。観光消費額は紐解くと、1人当たりいくら使ったかに人数を掛ければ総額が分かるのですが、実は大事なのは観光生産額だと思っています。例えば消費された商品の原材料の多くを地域外から調達していると、最終的にお金が地域外に逃げていくのですよね。よって、本当に見るべきは総生産額だと思っています。その際に鍵を握るのは、域内調達率みたいなデータになります。これがほとんど存在しないのが実態です。消費を増やしていく道筋も宿泊、飲食、買い物、交通娯楽等のサービスなど多様なものが実はあります。1人当たり消費額というのは東京都の観光調査でも、国の調査でも充実しておりますが、もう少し欲を言うと、細かい品目までわからないと、どうしたらいいのかというところまで繋がらないのが現状と思っています。この辺が公的な統計調査とか、民間が持っているデータとかを併せて良いデータが整備されると、観光の分析もより高度化していくと思っています。

これは耳にタコかもしれないませんが、世の中には色々なデータがありますが、何かビッグデータがあれば何でもわかるみたいな話がでてくるのですが、ビッグデータも限界があって、伝統的な統計データにもいいところがあるし、いろ

いろなデータをうまく組み合わせていく時代になっているという意味でいうと、やはりオープンデータは非常に重要になってくると思っております。

先ほどの方程式で、一番最後の観光生産を理解するのに鍵を握る域内調達に関する調査が国として1度だけ行われ、今は行われていないのが問題です。例えばそこで公表されている自治体の域内調達率を私の方で調べてみたのですが、例えば具体的に目黒区と小金井で起きている観光消費の原材料は、2~3割ぐらいしか東京都内のものを使っていないことになります。域外から調達している割合が高いため、どんなに頑張っても消費してもらっても最終的にお金が逃げていく構造になっていることを理解することが非常に大事だと思っております。

東京都の方も、訪都者の行動について詳細に調査していますが、訪問した場所についてはもう少し細かくデータが欲しいです。しかしいわゆるアンケートベースだと限界もあるので、こういうときこそビッグデータとうまく組み合わせ、アンケートは消費費目をかなり細かく押さえていくような連携の必要があると感じています。

今は一般の人でも、プラットフォームを使えばビッグデータを分析できる時代になっていまして、RESASは非常に有名ですが、観光の分野では観光予報プラットフォームがありまして、有料会員になっていただければ、半年先の自治体別の宿泊の予測数が分かたりするように、こうした世界も革新してきています。ただ、過去の実績と現在の予約数から推定しますので、今コロナ禍で予約が入ってない状況だとなかなか予測しづらい状況で、少しイレギュラーなイベントがあるときにどう予測するかは、まだまだ課題だと思っております。アフターコロナで予測が安定をしてくると、飲食店などでは十分に活用できると思っております。

ビッグデータで今までわからなかったような現象もかなり分かる状況になってきているため、自分達ではそういったものを購入できない中小企業の方に、何か条件付きでデータをうまく活用していただくような体制ができないかなと日々考えているところです。

最後に SDGs の話で、世界中でその認証制度を作って、観光地がその認証が得られると観光客の信頼を得ることができ、集客に繋がるような流れに 5 年以内でなりそうだとということで、日本でも観光庁で急ぎこのガイドラインを策定して、各地でこの試行的な取組が始まっています。

もともとは 20 年近く前に、国連世界観光機関（UNWTO）から観光の持続可能性を 750 ぐらいの指標で評価をするアイデアが出され、計測可能なものをうまく選んで先ほどのようなガイドラインができていると思っていますが、エネルギー管理とか、水資源ゴミ処理などの環境負荷も公開しなければなりません。

産官学が地域で協調し、環境の質とか観光による環境の悪化とか、観光がもたらす便益とか、文化の状況をモニタリングして、公開するための組織が UNWTO の応援の基、世界で作られています。日本はまだ加入組織がなく、東京を含めた日本の観光地で課題だと思っています。

いずれにしても、観光の世界でも経験や勘だけに頼らず、色々なデータをうまく使いこなして、より良い観光政策作りに舵を切る必要がある中で、その体制が取れてないところの悩みが非常に大きいです。

データを公的な組織できちんと整備していただいて、それらを適切に提供する体制ができれば、研究も研究者も増え、彼らが事業者を巻き込んで良い観光地域づくりに繋がる機運は高まっていくと思いますので、観光分野でのオープンデータに期待しています。以上で話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

事務局：

清水教授ありがとうございました。それでは、ここから意見交換に移りたいと思います。提案ごとに、それぞれ意見交換を進めさせていただきたいと思います。まず提案 1 につきまして、プレゼンの中にありましたエレベーター情報の公開につきまして、交通局からいかがでしょうか。

交通局：

交通局でございます。奈良様から交通局のオープンデータの取組を取り上げていただきまして、大変ありがとうございます。

交通局では、民間のアプリ開発等により、お客様の利便性が向上することを期待いたしまして、積極的に都営交通のデータをオープンデータとして提供してまいりました。その結果、都営地下鉄、都営バスにおいてもリアルタイム位置情報が乗換検索や地図アプリを通じ、多くのお客様にご利用いただけるようになったことは、交通事業者としては冥利に尽きるところでございます。ご利用いただいている事業者の方々にも、この場をお借りして御礼申し上げます。

エレベーターの件でございますが、ニューヨーク州の事例など、有効性等をわかりやすくご紹介していただき、ありがとうございました。現在、交通局では、ホームページで当該の情報を提供しておりますが、今後、ご要望いただいたエレベーターの点検日程につきまして、オープンデータ化の検討を進めてまいります。今後ともお客様のお役に立つ情報を発信できるよう努めて参りますので、引き続き、都営交通をご愛顧たまわりますよう、よろしく願いいたします。以上でございます。

事務局：

奈良様、交通局からの発表についていかがでしょうか。

奈良氏：

そうですね、まさにエレベーター点検日程のオープンデータ化について、前向きなご回答いたしましたことを冒頭で御礼申し上げたいと思います。

オープンデータ化されることによって、そのユーザーの利用シーンで、家を出てから目的地に着くまで、まさにそのオープンデータのみでシームレスに移動できるようになるのかなということで、開発者としても非常に楽しみにしております。

ちょっとプレゼンの中でお伝えしきれなかった部分かもしれませんが、今後、エレベーターの件も含めてオープンデータ化を進められる際には、既存の他のデータ、すでに一貫したコード体系を持たれて提供されておりますので、そういった既存のデータと組み合わせて使えるような形で、ぜひ今回のエレベ

ーターのデータについてご検討いただければ、非常にありがたいと感じております。

事務局：

ちょっと違う視点で遠山様、今の交通局のデータはスタートアップの方からしても魅力的なデータなのではないでしょうか。また、交通局が持っているデータとかで、サービスに活かせるようなものはありそうですか。

遠山氏：

そうですね魅力的で、使いたいと感じます。例えば健康アプリっていうのは街中を歩いたりするので、そこに交通の情報がある、高齢者の方にとってすごく便利だなと感じますし、飲食店さんに対するサービスでは、電車の遅延を検知すると駅が混んでいると推定できるため、飲食店で少しその時間を潰す。例えばバスだったり、電車だったりっていう、交通機関がもっとリアルタイムになればもっといろんな情報で検知できて、飲食店、ホテルなどへ誘導できるため、非常に魅力的なデータだと感じました。ぜひ頑張ってオープンデータ化していただければと思います。

事務局：

清水教授は、交通の分野にも非常に造詣が深いと伺っていますが、例えば駅のエレベーターをはじめとした交通に関する情報をもっと連携した方が良いという奈良様のご意見についてお願いできますでしょうか。

清水教授：

自己紹介のときに言い忘れたのですが、元々交通計画が専門で、観光は後からなのですが、モビリティの話はもちろん観光にも繋がっていきますので、非常に興味が大いところでは。

静的なデータに動的なデータを掛け合わせ、将来起きそうなことをリアルタイムに検知をして、それに対してその周辺にいる人達が上手に商売していくイメージです。ダイナミックな人の位置情報とか移動データが立体的に対応でき

ると、すごく痒いところに届く観光のサービスオファーができると思います。こうなると、観光分野の収益や労働生産性も上がります。交通データはこれらのことのベースになってくるので、そのようなデータが様々に出てくると、かなりいろんなことができそうだという予感がありまして、その集大成みたいなものが MaaS かなと思っています。非常に期待感が大きいと思っています。

事務局：

ありがとうございます。内閣官房から平本政府 CIO 上席補佐官がご参加いただいているので伺いたいのですが、交通分野もですが、データの質が重要になってくると思うのですが、内閣官房の取り組みを教えてください。

平本氏：

データの質って非常に重視していて、先ほど奈良さんの話にも、遠山さんの話にもあったのですが、継続的に出されないというのが結構あったりですね、せっかく手に入れたのに空欄であったり抜けがあるとですね、行ってみたら実は通れなかったとかそういうことも起こります。それでデータの質っていうのはいくつかの側面があると思っています。継続的にサービス品質としてきちんと出しているかっていう問題と、もう一つはデータが間違っているというのもたまにありまして、位置が間違っているとかそういうのもございます。そういう点では今内閣官房の方でデータの品質のフレームワークっていうのを作ろうとしております。あとはですね、このデータファイル自体を見たときにそのデータの品質ってどうだろうというのは見分けが付きません。お魚とか肉は見た瞬間に鮮度がわかりますが、やっぱりデータって品質がわかりませんのでそういう可視化する指標みたいなものを今作ろうと思って検討しております。是非そういうところを東京都さんとも協力しながら進めていければなと思っています。

事務局：

それでは続きまして提案 2 について、遠山様のより事業者の視点から高齢者の健康作りに関しまして施設情報など、また食品ロスを減らすための卸売数量などのデータの活用のご提案がございました。これに関しまして、戦略政策情

報推進本部、中央卸売市場からそれぞれコメントをいただいた後、ご参加いただいている皆様に意見交換をさせていただければと思います。

戦略政策情報推進本部：

まずは、奈良様、遠山様「だれでも東京」をご利用いただきまして、誠にありがとうございます。

本サイトは、オリンピックパラリンピックを見据えまして、施設のバリアフリー情報を発信するサイトとして、昨年の3月に開設いたしました。障害者高齢者など東京都を訪れるあらゆる人は快適に過ごせるように、都内の宿泊施設だけでなく、旅行者に人気の高い民間のレジャー施設とか飲食店、駅、公園、都立施設など、合計で900近い施設を掲載しています。バリアフリー情報のナビサイトだけではなく、掲載している情報を東京都オープンデータカタログサイトにて、オープンデータとして掲載しており、随時更新をかけるところでございます。データをオープンすることで、民間事業者やシビックテックの方による障害者支援や子育ての切り口などで、アプリやサービスの開発に繋がっていくことを期待しておりますので、ぜひご活用いただきたいと思っています。

引き続き、民間事業者とのサイト間連携を図るなど、内部の実施を取り組みながら、バリアフリーの情報発信について、あらゆる人が安心して活動できる東京を実現したいと思っております。

中央卸売市場：

本日は市場のデータについてご注目いただきまして、誠にありがとうございます。中央卸売市場では日々の取引データにつきまして、各市場の卸売業者さんご協力のもとで、予定数量、販売結果について、私共のホームページで公開しております。

私共は、そのデータについて、こういったところで価値を見出しているのかが不明な点もございましたが、評価して下さる会社の方や、産地、生産者の方にお役に立つデータだということが分かりました。

いただいたお話の中で、周知方法をさら広めてはというご意見と、機械判読できるCSVデータにした方がというご意見があったかと思っております。

まず周知方法ですね、これからこのデータについて、さらに活用していただくためにも、更に検討していかなくてはならないと感じています。現在私どものホームページの方では、データの置き場が分かりにくいといった課題もありますので、誰もが取得し易くなるよう検討して参りたいと思います。

もう一点の、機械判読できるデータというところですが、現在は CSV データを機械的に提供しておりますが、これを多くの方々に利用し易いよう、検討して参りたいと考えております。本日はどうもありがとうございます。以上でございます。

事務局：

清水教授からもお話あったように、PDF のデータを発信するのではなく最低限 CSV のファイルで出していくといったところから、まずは改めることからスタートした方がよろしいでしょうか。

清水教授：

まず、とにかく機械判読が出来て、あとはそのデータ入力の必要がなく、いきなり加工に入れる。やはりそういうことが大事で、それを徹底するだけでデータの利用価値はすごく上がると思いますし、使おうと気になります。まず PDF をダウンロードして打ち込む必要があるデータだと、諦めて違う手段を考えてしまい、せっかく公開している情報も機会損失ではないですけど、使われなくなると思います。地味ですが、せっかく良いデータを公表していただいているので、より使いやすく、最低限 CSV とかエクセルで読めるとか、それから今は、多分技術的な対応で勝手にデータが出来たりする時代ですので、意欲的にやっていただけるといいかなと思います。

事務局：

ありがとうございます。奈良様、機械判読のところも敢えて欲しいというご要望がありましたが、そこは我々もやっぱり努力しているところが必要になってきますよね。

奈良氏：

そうですね。やはりいわゆる食材として、データがそのまま開発者が使える状態になっているのか、それとも加工のひと手間入るのかによってやっぱり開発者側のモチベーションも変わってきますので、ぜひそのまま使える食材という形で提供いただけるよう、もっと広げていただければと思っております。

事務局：

ありがとうございます。平本様、戦略政策情報推進本部と中央卸売市場のコメントの感想をいただけますでしょうか。

平本氏：

私も今回のお話を聞いて市場のデータが出ているとか、あとは「だれでも東京」の話とか、あまりよく分かってなかったのですが、やっぱり周知がすごく重要だと感じています。せっかく良いデータがあるのに使われないというのがありますので、我々もオープンデータカタログサイトとか作っているんですが、もうちょっと利用者の人にわかり易いような検索の仕方とか、そういうものをしていかなきゃいけないのかなと思いました。あと、「実は」というものの結構あるような気がしていて、データってあんまり整備しても誰も気づいてくれなくて、あのバスロケなんか結構便利に使っているんだけどみんなそれは裏でどういう努力があったとか知らないところもあると思います。そういう事例なんかもうまく合わせて周知していくってことが、市場でデータを使うにしても何にしても、皆さんにこういうふうな可能性がありますよということを周知するのが大変大切なのかなと思いました。以上でございます。

事務局：

では、最後に全体を通して遠山様、戦略政策情報推進本部と中央卸売市場のデータを上手く料理していただければでしょうか。

遠山氏：

機械判読できる形式であれば、ぜひ料理させていただきたいと思っています。すごく価値の高いものなので、今まで無い情報が作れそうで、そこがすごく面白いと思います。

事務局：

どうもありがとうございました。それでは続きまして清水教授より研究者の視点からのご提案がございました。これに関しまして、産業労働局からいかがでしょうか。

産業労働局：

産業労働局の環境施策におきましても、データを基軸により良い施策を考えていこうと問題意識を持っておりまして、政策目標として訪都外国人旅行者の増加ですとか、特に旅行者による消費額の調査に着目してきました。先週2月12日金曜日に公表しました「未来の東京戦略」におきましては、訪都国内旅行者の消費にも着目し、政策目標としたところでございます。こうした観光政策で有している問題意識をデータ基軸にしてより良い施策を打てないかという問題に対しまして、清水教授から非常に広範なところで具体的に整備して問題提起をいただいたと思っています。今回清水教授のお話を踏まえまして、検討をしていきたいと思っているところでございます。

奈良様、遠山様から、バリアフリールートやデータで人の気持ちを動かすなどのお話がありましたけれども、観光施策というのは国内国外のそれぞれの方のご希望に合った形で東京での観光を楽しんでいただける体験の質の向上を図っていくというのが大事だと思っておりますので、やはりデータで捉え、訴えるのが非常に大事だと思います。データを提供するに際し、具体的にどこから見える形で始めて行った方が良いのか考えて取り組んでまいりたいと思います。

事務局：

ありがとうございます。まずは今の観光の視点からですね。奈良様、交通の話が出たと思うのですが、観光のオープンデータで出来そうなことのイメージありますか。

奈良氏：

個人的には人流データですね、人の流れに関するデータには非常に注目しております。一部いわゆる開発者向けのコンテストですね、期間限定で公開されているようなものもございます。私も形にして、楽しんでいるというところですが、オープンデータに関して取り組んでいく中で、いわゆる観光事業者の方々からも個人的にご相談いただくことが非常に多いです。

個々のお店に対して、例えば2月が繁忙期だとか、8月が繁忙期なんてざっくりしたデータはあるのですが、観光客がこういったルートで移動しているのか、あるいはこういった属性の方がこういったまちに溜まりやすいのかっていうところが、データとしては提供されているだけでもオープンではないため、各団体さんでの予算感だと手が出しにくいと。何かうまいやり方はないのかということをよくご相談されるのですが、オープンデータになってないかというところで、実は止まってしまっているというところもあるんですね。まさにその人流データというところが、今の観光客の現状を把握するための最初の第一歩というか、非常に有益なデータであると理解しておりますので、そういったところも含めて、拡充のご検討いただけると非常にありがたいと考えております。

事務局：

ありがとうございます。遠山様も観光データについてコメントいただけますか。

遠山氏：

観光に対してもサービスを展開したことがありまして、実は山梨県富士吉田市で観光と渋滞の研究をしたことがあります。山梨県富士吉田市は、新宿から車で2時間ぐらいなので行きやすいのですが、日曜日の夕方とか帰りが大渋滞します。富士吉田市から東京に帰る方で、発生する渋滞を検知して、渋滞が発生する30分ぐらい前に、その富士吉田市の店舗でタイムセールを準備してお

いて、いざ 30 分後に渋滞が発生しとなったら、飲食店でタイムセールをやっているから、ここでもう少し時間をつぶしたら渋滞なくなった時に帰れるのではと。こういったことを実証実験やったのですが、富士吉田市は飲食店の数が限られているため、お店ごとのリアルタイム情報があるとすごくありがたいなというふうに思ったことがあります。

高齢者に対する健康サービス提供していますが、コロナ禍であまり密集しているところに行っても困るので、そういった人の流れっていうのも、観光スポットで可視化できれば、すごくありがたいなと思っています。

事務局：

データの持続性について内閣官房で検討していることがあれば教えてください。

平本氏：

データを持続することは大変重要だと思っております、そのために我々今データの標準化を一生懸命やっているわけです。サービスを持続するには毎回毎回フォーマットが違ったりすると、アプリを作る人も困ってしまいますし、あとデータを提供する人もまた違う書き方かよってという形は困ると思います。そこでデータモデルの標準化っていうことで今、地方創生の本部と一緒にあってスーパーシティとか、スマートシティなんかに見えるデータモデルというのをいろいろ集めてみようよという取り組みをやっていきます。それでデータモデルを作ると共に、あともう一つはデータを入力しやすい仕組みが必要ですよね。今までのように横に長い Excel に入れてくださいっていう形だと結構つらいと思うのですが、そこでバリデーションして間違ったら直してくれるとか、サジェスチョンしてくれるとか、そういうような仕組みを合わせて提供することによって、皆さんが、これ入れるのは楽だよなと思ってフィードバックが返ってくるような仕組みや、それによってお客様が増えたとか、そういうような全体の流れをお見せするっていうことも重要なのかなと思っております。

事務局：

ありがとうございます。観光の視点からいろいろお話しいただきましたけれども、観光のところだけでまとめていただけるとありがたいです。

清水教授：

まず、産業労働局さんからお話ありました、いろいろなデータをどこから整備していくべきかについてです。やはり一番ベタに言うと、政策課題にとって重要なところから手をつけていくか、もしくは、やり易いところから手をつけるかのどちらかだと思いますので、その辺はある程度計画立ててやることを決めて、やっていただけると嬉しいと思いました。

あと、奈良さんの仰っていた人流データは、すごく価値が高くて、私も研究ベースでどのぐらい細かく見えるのかを、高いお金を出して購入していろいろと分析しているのですが、大まかなところは分かるのですが、もう少し細かいレベル、飲食店とか、観光産業のマーケティングに繋がるためには、もう一步データ量を増やす必要がありそうですし、どうしてもプライバシーの問題が出てくるので、分析の解像度をすごく歪められてしまいます。

細かいことが分析をしてもいま一つ分からない感じです。この辺をもう少し改善できないかという思いは持っていますし、そういったデータを、我々は研究者ということで予算付けて買うことはできるのですが、一般の事業者の方は予算的になかなか難しいと思いますので、例えば自治体が基金を集めたり、国が民間のデータビジネスを壊さない程度にデータ買ったりして、公開する仕組みでも作らないと、色々な観光地がそのようなデータをほとんど活用できないのではないかと思います。本当にそんなことができるのか改めて考えてみたいと、お話を聞いて改めて思いました。

それから富士吉田のケースは遠山さんがやられていたのですよね。私も似たような問題意識で研究していたことがありまして、高速道路を拡幅するのはお金も時間もかかりますので、例えば日曜の夕方になんと3時間ぐらい高速道路の利用者の5%、あるいは10%の人が寄り道してくれるだけで計算上渋滞はなくなることを活かしたいと思っていました。

しかし一番の問題は、店が開いてない。道の駅も17時で閉まるとか、地域に滞在させようと思っても滞在できない仕組みになっています。エビデンスを

持って、お店を開けてくれたらこういう客が行きますよということを分析、提示をしていくことは重要だと思っていますし、研究を始めた5年前のデータや通信技術の環境ではできなかったのですが、今だともう少しそういう課題に対して解を出せそうな気はしていて、またハイライトされていい研究にもなりそうですし、良いビジネスにも繋がりそうだとお話を伺っていて思いました。

事務局：

ありがとうございました。ここまでは各プレゼンターの方々からのご提案につきまして意見交換をさせていただきました。

ここより、今回いただいた提案に限らず、都のオープンデータの取り組みであるとか、これからのオープンデータの活用に向け、都が目指すべき姿などにつきまして、ご意見をお聞かせいただければと思いますがいかがでしょうか。

樋口部長：

活発なご議論ありがとうございます。かなり時間が押しておりますので、5分程度でお話いただければと思っています。我々は、とにかくオープンデータをどんどん活用していただきたいと、その入り口として、カタログサイトをどんどんご利用していただきたいなと思っています。今200PV/日を、5倍程度まで早急に上げていきたいと思っています。いろいろとお優しいご意見いただきました。今カタログサイトをご覧いただいていると思いますが、奈良様いかがですか。忌憚のないご意見をいただきたいと思っています。

奈良氏：

そうですね、私も毎日5~10回アクセスしているのですが、やっぱり他の登壇者の方々もご指摘されていましたが、検索性が悪いといいますが、もともと目当てのデータがどこにどういう名称で、どういうキーワードなのかが分かれば、かなりさっと検索してダウンロードできる非常に便利なサイトではあると思うのですが、なかなかパクッと知りたいことがフワッとある中で、目当てのデータにたどり着くというところが、ちょっと1日数回アクセス

している私でも、まだまだ慣れないところがありますので、例えばデータのカテゴリ分けを、もう少し今はおそらく部局単位で分かれていたり、そういう考え方なのかもしれませんが、少し都民のユースケースというか、利用シーンに合わせた検索の仕方みたいなものを追加で提供されるといいのかなと感じました。

あとはですね、いわゆるオープンデータ、実際やっているデータでこんなことができますよっていうような、サンプル的なダッシュボードみたいなのがあると、よりオープンデータに対する関心が高まっていくのかなというふうに感じていまして、実際の札幌市などが参考になってくるのではと考えております。

樋口部長：

ありがとうございます。大変貴重なご意見ですね。奈良様がおっしゃったように、ふわっとしたものに対しても、ある程度こういうもので我々もふわっと、しっかりとしたラインナップで、ご提供できればというのが良いわけですよ。

先ほど清水教授もおっしゃっていましたが、観光というところで、例えば人数とかではなくて、あるいは観光の負の部分ですよ。環境問題ですとか、そういった話も提供できるような、そういう分野の構成の仕方もちょっと考えていきたいなというふうに思っています。

清水教授いかがでしょうか。

清水教授：

奈良さんのおっしゃっていることは正にその通りと思っていまして、東京都的に言うと局別で対応することも大事ですけども、いろいろな分野が合わさったような問題意識を持ったときには、そういう目的意識側から正確なデータにたどり着く検索のあり方も重要だと思いますし、ダッシュボードというアイデアは私も大いに賛成で、どういうデータがどういうふうに加工作ってどういうことができるのかを例として示されるようなものがあるといいと思いました。

あとは大学教員の立場から言うと、学生にもっとデータを使って欲しいと考えています。そういう場合に、いわゆるアイデアソンとかコンペじゃないですけども、何かチャレンジ性のあるような仕掛け、データを使って何かを提案してもらい、いいものは褒めて賞を与えるとか。そういったことで若いうちからデータの存在や活用を意識してもらえたらいい気がしますので、そういうことも検討されてはどうかと追加で思いました。

樋口部長：

清水教授ありがとうございます。データを使ってどういうサービス、あるいはどういう研究に結び付けられるかを具体例として示していきたいなというそういうお考えは全くもっておっしゃるとおりと思っています。

来年度ですね、我々アイデアソンですとかハッカソンを「都知事杯」ということでやっていきたいと思っています。あくまで計画段階ですが何とかそれを開催して、継続というところで第1回、第2回、第3回と常にやっていく形でやっていきたいなと思っています。そこについても、また皆様にご協力をお願いできればと思います。

最後になりますが、やっぱり周知不足というところ、これも非常に耳が痛かったです。各スタートアップ企業さんが、我々のカタログサイトの取り組みをご存知ないと。遠山様いかがでしょうか。

遠山氏：

そうですね。ハッカソンはすごくいいと思います。やはりデータだけだとやっぱり興味っていうのは少し薄れるかなと。でもこのデータが何かしらのアイデアが生まれ、それが誰かの役に立つっていうことを、「だれでも東京」のデータをハッカソンで、そうすね役に立つアプリにまた何か載せると、このデータからこんな便利アプリが作れるという体験を、その開発者が自分から皆さんに報告したくなり、周知がスパイラルしていくと思います。

ハッカソンもすごく僕としては良いですし、奈良さんもおっしゃっていますけどニューヨーク州でもそういったことが蓄積されているということなので、すごく今風な形なんじゃないかなと思って、すごくいいと思います。

樋口部長：

引き続きよろしく願いいたします。

事務局：

最後に平本様よりラウンドテーブルテーブルに参加いただいたご感想をいただきたいと思います。

平本氏：

我々もラウンドテーブルやっているのですが、フォローアップっていうのが重要だと思っております。こういうところで、色々ないい話題が提供され、こういうことやったらいいよねっていう、けれども本当に最後まで行けたかっていうところがフォローアップできているのもあれば、できてないものもあります。そういうことをやっていくのと、先ほどご説明にもありましたようにコンテンツなんかを継続的にやっていくっていくことが重要です。そうすると、次の来年頑張ろうとかそういうのもありますので、そういう意味でやっぱり継続してやるっていうのを、姿勢として外にもっと公表していただくと、特に学生さんなんかすごい励みになると思います。継続的にやる仕組みっていうのを国と東京都と一緒にやらせてもらえればなと思っております。どうもありがとうございました。

事務局：

ありがとうございました。最後に樋口部長より御礼申し上げたいと思います。

樋口部長

本日はお忙しいところありがとうございました。奈良様、遠山様、清水教授それから平本様、本当にありがとうございました。

とにかく、継続するという強い意志を持つ必要があるということを改めて認識いたしました。引き続き精進してまいります。ご助力あるいはですね、ご助

言賜ればと思っております。よろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

ラウンドテーブルの内容につきましては、引き続き事務局からもフォローさせていただきたいと思っております。

それでは、本日はこれにて閉会とさせていただきます。大変貴重なご議論をいただきまして誠にありがとうございました。

以上